

連	載	
講	座	
第	9	回

## 民政責任者に三人トリオ・徳川家康

作家 童 門 冬 二

徳川家康は、幼年時から青年期にかけて他大名家の人質だった。とくに、駿府(静岡市)で、今川家の人質になった期間が長い。八歳から二十歳までである。こういう境遇にあつて、家康はつぶさに人間のきもちを知った。そして同時に、大名としての責務は民政にある、と感じた。成人したかれは、やがて織田信長と今川義元の“桶狭間の合戦”によって解放された。信長と同盟し、故郷の岡崎城に戻った。このとき家康は、駿府で身にしみた「民政の大事さ」を実行するために、岡崎町奉行を設けた。おそらく、戦国末期で民政に関心を持ち、こういう責任者を設けたのは家康が最初だろう。しかし家康には、

「人間の能力には限界があつて、たったひとりですべての仕事をごこなすことはできない」

という考えを持っていた。そこで新設の岡崎奉行には、三人の部下を任命した。高力清長(こうりき・きよなが)・本多重次(ほんだ・しげつぐ)・天野康景(あまの・やすかげ)である。

これら三人の武士は、すでに住民たちもよく知っていた。それぞれ特性があつた。そのため岡崎の城下町の住民たちは、任命された三人の町奉行に対しこんなことをいった。

「ホトケ高力・オニ作左・どっちでもない天野康景」

高力清長はホトケのように人情深い。本多重次は通称又左衛門といつて非常に恐い。そこへいくと、天野康景はどちらでもなく、ホトケとオニの両性格を持っていた。家康にすれば、

「高力清長は人情深く、おそらく裁判などがあつてもきびしい罰は下さないだろう。そこへいくと、本多重次はオニと呼ばれているように、法に背いた者はきびしく罰する。まさにホトケとオニの関係にある。そこで、両方の性格を併せ持っている天野康景が間には入り、三人で相談すれば民政は必ずうまくいく」

という腹積もりだったのである。しかし、この三人トリオの奉行ぶりは必ずしも住民に好影響を与えなかつた。かなり批判があつた。それに、三人が相談して出した「触れ(掟)」を、高札に書いて辻に立てても、あまり守られない。逆に、苦情が次々ときた。三人は首を傾げた。

「なぜだろう?」「住民はどうして掟を守らないのだ?」「掟の内容がきびしすぎるはずはない。常識で考えて、これなら守れるだろうというものに触れたはずなのに」三人は口々にそういい合つた。本多重次がいった。「どんな高札を立てているのか、実際にみてみよう」。

そこで部下に命じて辻に立てた高札を一本引き抜いて持ってこさせた。三人は文面を読んだ。本多重次が「これでは守れるはずがない」といった。高力清長が「なぜだ?」ときいた。

本多は「全部漢字で書いてある。住民に読めるはずがない」「そうはいつでも、掟の文章をカナにするわけにはいかない」高力が反対する。「がしかし、本多のいうことにも一理ある。

これではわしでも読めない」天野康景が割って入った。三人は相談した。本多は全文カナにしようといったが、高力は反対する。将があかない。最後に天野康景がこういった。

「読める字は漢字にしよう。読めない漢字はすべてカナにしよう」この提案に、高力清長も本多重次も賛成した。漢字を極力少なくして、カナを多くした触れが立てられた。これは住民たちにもよくわかった。掟が守られるようになった。三人の奉行たちは顔をみあわせて笑った。三人の中の本多重次には、有名な“日本一短い手紙”がある。

一筆啓上火の用心お仙泣かすな馬肥やせ

というものである。文中でお仙というのは女の子ではない。仙千代という本多の長男のことをいう。成人して越前(福井県)丸岡城主になる。かつて丸岡町はこの故事を活用し、全国に「日本一短い手紙」を募集した。

「地方自治体の鮮やかな発想」として、かなり有名になったことがある。さて、家康のチエによって三人の武士が、いわゆる合議制・集団指導制によって岡崎奉行の仕事すすめていた。家康はじつとこのことを凝視していた。しかし、三人が集団指導をしたり、合議したりするのは結局は、

「合意点を求めるための妥協」

がおこなわれることになる。そうなると、もつきびしくしなければならぬ掟も緩やかになったり、あるいは骨抜きになったりする。家康は最初はうまくいくと考えたこの三人トリオの奉行制が、必ずしも自分の思うとおりに機能していないことを悟った。そこでである日三人を呼んだ。こう告げた。

「これからは、おまえたちの仕事を月番制にする」

「は？」

三人は顔をみあわせた。月番の意味がわからない。家康は説明した。

「三人のうち、毎月交替で町奉行の仕事をおこなうということだ。高力が当番のときは、本多と天野は休め。そして高力のやり方をよくみつめろ。本多が番になったときは、高力と天野は休め。天野が当番になったときは、高力と本多が休む。月番というのはそういうことだ」

「は」

三人はまだピンとこない。とくに気の短い本多重次は、

「お館様、月番になさると、なにかいま以上の効果がございますか」

ときいた。家康はうなずいた。このとき家康が説明したのは、

- ・月番にして、三人が交替で仕事をすれば、岡崎城下町の住民たちも三人の仕事を比べることができる
- ・賛成もあれば、反対もある。批判力も湧く
- ・それが、三人にとってよい薬になる。合議制だと、どうしてもナアナアと妥協する面が出て

くる。これは決して市民のためにならない  
そういうことであった。三人は納得した。そして、いままで以上に緊張してほかの奉行に負けないように努力するようになった。家康の巧妙な人の使い方であった。